
ラブレター

魔法戦隊三輪野助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブレター

【Nコード】

N0307B

【作者名】

魔法戦隊三輪野助

【あらすじ】

新一のげた箱に入っていたたくさんのファンレターの中に一つだけラブレターが…

セラブレターがきた？（前書き）

恋の始まりのセラブレターがくる話です

壱ラブレターがきた？

靴置き場★★★

「新一、早くしないと授業に遅れるよ…」

いつもどおり蘭が新一を呼ぶ

「はいはい…」

「はいは 一回でいいの」

うるさい蘭に新一はため息をついた。

{はあ…}

新一は自分のげた箱を開けた。

その瞬間、

たくさんのファンレターがげた箱から落ちた

「いてえ…」

山のように、あるファンレターを新一は教室に持っていった

とりあえず、ファンレター全部に目を通して

でも一つだけ、ラブレターらしきものがあ

名前は、

サリー・ハミルトン

イベリスとヒースの子みたい

「35巻より」

でも、字は日本語

内容は、

あの事件で父さんを殺した犯人を捕まえたことに感謝しているみたい

その時に新一に一目惚れしたんだって！

新一は、外国人の生徒がいたんだという感じで、ラブレターを読んでいた

その時、

「はじめまして、 いや：両親はあなたとあったかな？

私は、帝丹中の生徒だけど 今日帝丹高校に来ました。

これから、よろしく願いします…」

挨拶をしにきたのは

外国人だった

セラブレターがきた？（後書き）

サリーハミルトンを

イベリスの子にしたのは、なんとなく

ヒースと夫婦みたいだから

式ラブレターから恋バナ（前書き）

ちょっとわかりにくいと思います

式ラブレターから恋バナ

彼女は、白人と同じぐらいの白さ

そして、笑顔が ありえないほど満ちあふれていた

母親と違って、人が良さそうな気がする

外国人のわりには、日本語になじんでいる

ちょっと不思議だ。

新一は何気に、

「お前は・・・？」

と聞くと彼女は、

「失礼！ 名を名のるのを忘れていました

私は

サリーハミルトンといいます 私は、英語はあまり話せませんので、日本語で話してください！」

「えっ：、」

新一は外国人のくせに 英語が話せなくて

日本語が話せるのでワケがわからない

し、驚いた

「私の両親は2人とも忙しいんです

それで、私はよく日本人の知り合いに世話になって いるから、日本語になじんでしまいました」

サリーは、必死で新一にしゃべっていた

蘭は新一の周りを通りながら、新一がいることを知らないふりをした

新一はそれを感じずいた

「オイ…、まで！

蘭 どうしたんだよ」

蘭は新一を横目で見た

相変わらず 人の気持ちが変わっていない

蘭は、嫉妬しているんだよ

他の人としやべっていたから…

「新一、 こちらは誰？」

「ああ：

サリーハミルトンっていうやつだよ！」

サリーは行儀良くしていた

「初めてまして」

毛利蘭さん。」

声のトーンがいきなり変わった

見た目 おっとりしてマイペースそうなサリーも

恋が関係すると、ちょっと別人に見える

恋すると、人が変わってしまうことに蘭は驚いた

「ねえ、サリー…

あなた帝丹中の生徒でしょ

中学校に戻らなければいけないよ…！」

蘭は空気が重いのをごまかすように話をそらした。

しかし、サリーは

クスクスと笑った

「どういふつもりですか？

あなたは抜けがけでもしようとしているんですか？ 甘いですよ…

ラブレターを勇気を持って渡した この私に、新一さんをあきらめてもらおうなんて、思っているんですか？」

新一はとりあえず サリーからのラブレターを手を持ちながら、話を聞いていた

「何が 抜けがけよ… 別に私は」

蘭は新一の方を一瞬見て顔を片方隠した

サリーはまた

クスクスと笑い 小声で

「蘭さん、素直じゃないですね…」

そんな様子じゃ私が新一さんを横どりしますよ

『好き』と言えないようじゃあねえ」

でも、新一本人が

好きなのは素直じゃない蘭である

サリーはとりあえず学校から去った

新一は、サリーからのラブレターを封印しておいた

参ラブレターの返事は？（前書き）

サリーとハミルトン家絡みではありません。

参ラブレターの返事は？

ハミルトン家

「新一さん 私のラブレターをみてくれたかしら．．」

サリーはラブレターの返事を待っている

つつい自分の部屋のぬいぐるみを投げつけてしまおうぐらい
興奮していた

「新一さん、

あなたは、私のことをどう思っているのですか？」

と一人でつぶやいていた

工藤新一郎★★★

新一は、自分の部屋で推理小説を読んでいる

「よっしゃ：：！！」

今日は、推理小説3冊読破したぜ！

いやあ：： こんなのも最新記録だもんな：：」

さすが、推理オタク

推理小説を一度、
読みはじめたら 止まらない

「あれ？ 何か忘れている気がするが
何だったけ？ 確か今日：」

ラブレターをもらったことだよ！

推理に夢中になりすぎで 他のことは気にしてないみたい

「どーせ そんな重要なことでもねえみてーだし：
アホらし
知らん。まっいいか」

今日、サリーと会ったことすら、すっかり忘れている

サリーは、自分のことすら新一に忘れられるとは 知らないだろう
に・・

ひでえなあ この推理オタク：
：

毛利探偵事務所

蘭は、自分の部屋に閉じこもっている

「『好き』と言えないようじゃねえ…」

蘭は、サリーに言われたことを気にしている

確かに 蘭は自分の想いを新一に素直に伝えないからね…

サリーは ラブレターを渡す勇気があるから …

この日 蘭とサリーは新一に関係することについて考えていた

しかし、当の本人は恋より、 推理小説に夢中になっている

サリーが新一に送ったラブレターもとりあえず 残っているけど
どこにしまったかは知らない

翌日★★★

蘭は新一の家の前で

新一が来るのを待っている

あいかわらず 新一はこない

蘭はその間の時間暇だったので

家のポストの中を探っている

一つだけ 手紙だと思われるものがあつた

その手紙は封筒の中に嚴重にしまつてある

差出人の名前は

サリー・ハミルトン

まさか、またラブレターか？

手紙の中身が知りたい蘭は しっかりとつけられたシールをはがし、

封筒を開けた

そして、手紙の内容を読んだ

新一さんへ

昨日のラブレターにたいする返事がほしいです！
放課後

6時30分に帝丹中学校の屋上で 待っています。

b y サリー

蘭は 尾行を決意した

その時、 新一が支度を終えて、家を出た

「よおー 蘭 遅くなっちゃったな ．」

「う、うん……」

蘭は突然来た新一に思わずびっくりして
サリーの手紙を隠した

「ねえ ……新一 サリーから手紙きているわよ！」

「手紙？」

なにやら不思議そうに手紙を読んだ

新一は首をかしげながら、しばらくだまっていた

「蘭・」

この手紙 読んだだろ！？」

その質問に蘭はドキッとした

「え、ええ みた よ・」

「みてないよ・」

って言いたいところだがそんなの新一にはすぐにばれてしまう

なんとなく気まずい蘭は目を横にそらして話す

「新一は サリーに返事を伝える？」

「まあな…。」

「それで ・・何を
言う の？」

「断るって 伝えるよ・」

「えっ…」

蘭は新一の反応に少し驚いた

新一はまだ昨日のラブレターについて何も 考えていない
2人はそのまま学校に行った

学校はざわめいている

そして仲間とくだらない話をしたり、
普通に授業を受けていた

新一は1日 何もないかのように平凡に過ごしていた

言いたいことを言うまで：

6時30分★★★

約束の時間になった
辺りはもう暗くなっている

人の歩いている姿はあまり見かけない

夕日が寂しそうに
屋上を包んでいる

サリーは 屋上のフェンスから、真下に新一がいるかをしっかりと
見ている

しばらく 見下ろしていたら
新一が帝丹中の中に入った

「来た!!」

サリーは興奮していた

階段をのぼる時の足音がだんだん聞こえる。
近づいてくる!

そう思うと緊張して何もかも見失ってしまう

サリーが、緊張と興奮が混じりあっている間に新一が屋上に着いた。

屋上では、新一もサリーも黙っていた
しばらくの時間、屋上は沈黙の世界だった

新一は言いたいことがある

でも、どうやって断ればいいのかわからない

「あの…返事は?」

サリーから話した

「ああそれか…… 悪い!

オレには、好きなヤツがいるんだ!」

(えっ…誰?)

そのまま新一の後をつけていた蘭が

ドアに隠れて立ち聞きをしている

「それに、ラブレターを書くのもいいけど、面と向かって本人に本音でいうほうが 伝わりやすいと思うぜ…」
恋愛に鈍い新一がこんなことを言うとは珍しい。

「では、新一さんの好きな人は蘭さんですか？」

(えっ、サリー!何で?)

また新一は黙った

「そうだ… オレは蘭が好きだ。」

(ほ、本当!?)

「フツ そっか やはり蘭さんのほうが好きですか？」

でもこうして返事をもらっただけでも私嬉しいです
応援します」

「ああ ……」

それだけいい残して新一は屋上から去った

その時、ドアの近くに蘭がいた

（あっ： やべ 蘭に今の会話聞かれちゃったな）
もう仕方ないから告白しよう！

「あのな 蘭のことが好きなんだ」

その後、蘭は

「ありがとう」
と言った：

参ラブレターの返事は？（後書き）

最終回です。やはり最後がいまいちになりますゞ（ゝー、）

私はまだ連載中の小説が残っていますが

下手なりに頑張ります

ほんとハミルトン家は関係ないし、

35巻のニューヨークの事件にも関係ない話になってしまいます。

そのへんはすいませんm（――）m

こんな作品に評価をお願いしますo（――＊）o

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0307b/>

ラブレター

2010年10月10日02時34分発行